

インターンシップ最終報告

チームH

3年 丹 笙

西塚 豪

三浦 拓人

2年 石山 宏香

課題 「公園のあらたな活用方法について」

○「サテライト老健のぞみ」という小規模老健の困りごと

地域の方にも使っていただけの施設と併設された公園がある。

しかし、

- ・施設と公園との間には駐車場があり、隣接しているわけではない。
- ・公園を利用するこども達と施設とでは関わりがほとんどない状況。

流しそうめん、花火、夏祭りなどのイベントも行って見たがどれも単発なもので継続的なかかわりが出来ていない。

日常的に高齢者とこども達が関われるような公園のあらたな活用方法を考案してほしい！

施設について

- ・普段施設へ遊びに来てくれる人は居ない。
- ・いつも同じメンバーで同じ生活 閉鎖的に、、、
- ・地域交流室というスペースはあるが使えていない。
- ・足湯 ……外からも入ってこれるような設計にしたが、
地域の方に使ってもらえていない。
→足湯を作った時と夏祭りの時にチラシを配った。
- ・面会時間 8時～20時
常にオープンな状態で塀などもなく、いつでも施設の中に入れる。

公園について

- ・公園側から施設を見てみたときに建物の中の様子がわからない。
→塀などがなくても入りづらい感じがある。

<公園にあるもの>

- ・滑り台などの遊具3つ
- ・花壇
→地域の方や子どもたちと植樹祭を行った。
- ・あずまや



○面会時間や足湯についてなど施設へ気軽に入ることができる
ということを地域の方へ周知できていないのでは？

<施設へ子どもたちが来てくれるようになったら>

- ・施設に居ながら社会と関わることができる。
- ・新興住宅小さい子ども達も達が幼いころから介護に関わることで福祉を担う人材を育てていくことができる。



ところが、、、

公園にある資源を活用してこどもたちが来たくくなるような仕掛けを考えるのが思いのほか難しい、、、、

花壇の利用などいろいろ案を出すか、こどもたちが来たくくなるような仕掛けとまではいかない。



一度落ち着こう。鎌田先生にきこう。

こども達を安心して遊ばせられる公園の条件

- 公園及び遊具が清潔であること …○
- 公園の周辺の治安が良いこと …×
(駐車場が隣接されていたり、道路が近い等)
- 親が休める場所があること(日陰など) …○
- 家から近い …○

- 水分を補給できる場所が近くにあること …△
- トイレが近くに設置してあること …△

→「そのままニーズになるのでは??」

利用者のニーズを施設内で満たせる作りにする

- 公園内にトイレが無い、水飲み場が欲しいという利用者のニーズを満たすため……



- 施設内のトイレを貸し出す、施設内でジュースだったり何かしらの、飲料を提供できるような仕組みがあれば、公園から施設へ足を運ぶための一番自然な流れが生まれる。

そこから……

視点を変える。

- 課題として、公園→施設に訪れるというイメージだった。



施設に、こどもが来たくなる仕掛けを作ること
とで、公園と施設を繋げる。(逆転)

この視点から実際に企画書作成してみる。

企画書の作成にあたり、幼老統合ケアの視点を活用した。

幼老統合ケアとは？

「幼老統合ケアとは、子どもの施設と高齢者施設を合築するなど、「高齢者ケアと次世代育成を融合・連携させることにより、費用対効果やケアの質の向上、高齢者の生きがいづくり、教育的効果など一石四鳥を狙う取り組み」です。子どもが減り、施設整備の財政事情も厳しいなか、幼老複合施設が増えていますが、その結果、ケアの一方的な受け手であった高齢者や子どもが、ケアの与え手にもなり、子ども・高齢者双方の福祉向上につながる注目が注目をされています」

<http://www.best-singapore-hotels.com/ja/i-kosodatenet/> 参照

じゃあ幼老統合ケアのメリットってなに？

意義

「高齢者側」

- 既存の施設に併設することになるので、費用の削減になる。
(活用できる土地の少ない首都圏で今後広まるかも・・・)
- 高齢者の活力があがる
(公園に行く等の行動増加、笑顔、いきがい)
- 脳の活性化が期待できる
(動き回る子供を見守ることで、気配り・目配りする機会が増えるため)

幼老統合のメリット2

意義

「こども側」

- ・思いやる心がはぐくまれる

(高齢者と接することで、同年代とは違った対応が求められる)

- ・挨拶やマナーなど常識を学ぶことが出来る。

- ・知識

(高齢者の方がもっている豊富な知識を得られる)

- ・こどもの情緒にいい影響を与える

(行動を否定されることなく、褒められる場面も多いため、気持ちが安定し自信に繋がる)

事例

「医療法人 ウエルネス医療クリニック グループホーム ひかりの里・くわなの宿」

同じ建物内に放課後の小学生を預かる学童保育所があり、困りごととしてこどもたちがやんちゃで保育士さんの言うことを聞かない。

そこで、施設の利用者の力を借りることに…

利用者の方と触れ合ううちにこどもたちに様々な変化が起きた。

利用者の方が本気で叱り、心から褒めることでこどもたちが素直になった。

一緒に食事を作ることなどを通じて、尊敬の念や料理の知恵を得られる機会にもなり、こどもたちの関心はお年寄りにもちきりだそう。

他にも失禁を繰り返していたお年寄りがこどもたちの前ではトイレに行くようになったりと認知症にも変化が見られた。

http://wellness-medicalclinic.jp/group/home_group-hikari.html 参照

事例2

「サービス付き高齢者向け住宅 銀木犀」

- ・サービス付き高齢者向け住宅「銀木犀」は、地域での多世代交流の一つとして全拠点に駄菓子屋を構える。
- ・この駄菓子屋は入居者が交代で店番を行っており、入居者以外の地域の方も駄菓子屋や隣接したコミュニティスペースや食堂に自由に出入りできる。

地域に溶け込むことが理想

- ・お菓子を買って、そのまま共有スペースで遊ぶこどもたちもいる。そこでは既に、入居者がくつろいでおり、自然と子どもと高齢者の交流している。
- ・入居者自らが店番を行うため会計、商品の陳列を行うため、やりがいや脳の活性化が期待できる。また、会計の際にこども達に算数の問題とばかりに会計を自ら行わせたりと遊び心のある接客もおこなっているそう。
- ・今では毎日20～30人が訪れる人気スポットとなっており、地域に溶け込んでいるといっても過言ではないだろう。

<https://www.care-news.jp/column/生き生きケア/Q9ORV> 参照

小真木原町の高齢化

山形県鶴岡市の小真木原町の65歳以上の人がどのくらいいるかについて、Jスタートマップを活用して調べてみた。



小真木原町はJスタートマップで見ると、245人以上いる地域が大半を占めている。

課題として浮かび上がったもの

- 現在、小真木原町では老人ホームも多くある。しかし反対に5歳～9歳までの子どもの数は49人以上が3分の1と少ないことがわかった。

他にも小真木原町は核家族が大半なため、共働きの家庭も少なくはなく子どもたちだけでいる時間が多く、世代間交流が少ないと感じた。

ポイント:この高齢化社会の町で高齢者と子どもたちで過ごすことができなにか自分なりに考えてみた。

企画書

・コンセプト

幼老統合ケアの視点を取り入れたサービス。

こども達が集まれるような居場所づくり、家や学校以外のこども達がおしゃべりしたり、何か楽しめるような居場所の提供。施設の利用者の方にできるだけ関わっていただき自身の「役割」というのを発見し、感じてもらいたい。

・ターゲット: 未就学児～小学校低学年

親、祖父母の同伴が予想されるので、施設の中を自然に見学でき外部の人が施設に入ってきてくれることで、閉鎖的なイメージが持たれずらくなる。

- 協力者：施設の利用者の方々、小真木原、沢田の元気シニア

施設の利用者の方にはこども達と関わってもらい、幼老統合ケアの視点からこども達、利用者の方双方にメリットがあると感じたため。

小真木原、沢田の元気シニアについて

地域密着の視点から、施設に近い小真木原と沢田の住民の方々にボランティアとして協力していただく。

× オムツたたみ、配膳

○ こども達と関わってもらう。

→区画を限定したことで、自力でチラシ等の投函が行える(1, 2時間程)

プロダクト

- 学童保育サービス

施設の一階や地域交流スペースを学校や保育園が終わった後に、集まって遊んだり、お喋りしたり宿題をする自由なスペースにする。

※保育とはいっても、しっかりとした「サービス」にするのではなく、あくまでも居場所の提供。

でもこれだけで、本当にこども達は施設
に来てくれるかな??



こども達が来たくなるような仕組み

・足湯プール

施設には地域の方でも使える足湯スペースが用意されており、それを再利用して足湯を夏季限定で水に張り替え、プールとして使う。

対象：親子づれ

課題：本来であれば外から足湯に入っても大丈夫な仕組みだが、段差があることで物理的、心理的にも入っていきにくい構造になっている。

・一回の大広間や地域交流スペースを子どもが自由に遊んだり勉強できるスペースにする。

施設にWi-Fiを設置してゲームができる環境づくりを行ったり、紙やペンを置いてお絵かきできる環境や、遊んでいるところとは話した場所に机などを置き宿題等をできる環境などをつくる。こどもたちに選択させる環境。

足湯の段差



また、大判容姿に勉強した時間に応じてすごろく感覚でマスを塗りつぶしていき、ある程度できたらご褒美(お菓子とか)などの仕掛けを作る。

・公園で読み聞かせ

施設の利用者の方をお願いして月に数回ほど公園の芝生のところで読み聞かせをする。

利用者の方にも、役割が生まれ。生きがいにつながることを見込んで、

※単発なイベントになってしまうかもしれないが会の終わりに次は「何をして」、「いつ」遊びたいかを児童にきく時間や考える時間を設けることで結果として持続的なものになるのではないだろうか？

• 駄菓子屋さん

施設の外に「駄菓子屋さん」として小さな屋台をつくり、お菓子の販売コーナーを設置し、こども達が自由にお菓子を買い取れるようにする。

駄菓子屋の販売員を、施設の利用者の方に行ってもらおう。

自然と日常的な会話が生まれ、利用者とこども達が自然に溶け込めることが、見込める



「役割」について

- 施設の利用者の方々の豊富な知識や、これまでの人生経験からくる人間味や包容力で時には、こども達が抱える学校の先生や家族に言えない相談を施設の利用者の方々にならできるかもしれません、こども達に対して時には本気で怒り、心から褒めてくれる。そんな存在は貴重な宝であり、地域の資源となりうると考える。

核家族の世帯が多いこの地域においてこども達が高齢者と、あるいは高齢者がこども達と触れ合うことは双方にメリットがあり、双方に役割が存在する。

したがって、「施すだけ」「支援するだけ」といった**一方的な関係を作っ**
てはいけないというのが今回の企画のスタンスでありポイントである。

ご清聴ありがとうございました。